

『東方』二八八号より

「お茶の席での格好の話題」 から日本観を探る

高橋孝助(宮城教育大学)

*

『点石齋画報』は一八八四年五月から一八九八年八月に至るまで、激動期の清末、上海で刊行された。我が国ではすでに、中野美代子・武田雅哉編訳『世紀末中国のかわら版——絵入新聞『点石齋画報』の世界』(福武書店、一九八九年二月、増補版、一九九九年三月、中央公論新社)が刊行されており、その前文にあたる部分で、同種の「画報」の紹介や清末の出版事情も含めて周到な考察をされている。

『点石齋画報』そのものは、最近では編纂物が刊行されているので、中国近代史研究者であればそれほど珍しいものではなく、中国近代史研究者であればそれほど珍しいものではなく、石曉軍氏の著書は、『点石齋画報』そのものを資料とする研究書としては、中野氏たちにつづく二冊目のものである。

**

『点石齋画報』には、一五年にわたって四千七百点あまりの絵入り記事が掲載されたのであるから、これを史料として見る場合には、幾つもの視点が可能となり、『画報』はそれらに十分に応える重厚な《事実》の宝庫である。武田氏は、『点石齋画報』が「美術史、文学史、科学史、宗教史、社会風俗史……」など、「あらゆる角度から読み取られることを待っている」と、その資料としての価値・可能性を指摘していた。因に、中野・武田氏の著書は次のように構成

石曉軍編著

『点石齋画報』にみる明治日本』

A5判・二三二頁・東方書店・二、九四〇円



されている。

ゾウを想え——清末人の《世界図鑑》を読むために

第一章 洞窟をくぐり抜けたら世紀末

第二章 彼方の国と人びとの風景

第三章 檻のない動物園

第四章 異形のものたちの行進

第五章 科学と機械の幻想譜

石曉軍氏は、『点石齋画報』を「近隣のアジア諸国からの印象」を示す「絵画資料」として注目し、これを「中国絵画の中の日本像」という観点から読み解き、特に「一九世紀八〇年代から九〇年代末頃までにおける一般的な中国人の対日認識の一端」、「晩清時代における中国人の日本観および

- ▼ 『東方』288号より
- 一 「お茶の席での格好の話題」から日本観を探る
- ▲ 高橋孝助

清末の人々の見た明治日本の横顔」を明らかにしようとして
れている。氏は、先行研究が「知日派の開明官僚・エリー
トたちの日本観をめぐって展開」され、彼らが「清末におけ
る中国人一般の代表的日本観」として認めているようだと
しながら、彼らの日本観は「清末中国人の日本観の一側面
にすぎない」、「民間の絵師の手になる『点石齋画報』の記事
から窺える対日認識と日本像こそ、より広い意味で晩清に
おける中国大陸の日本観を反映したものであるといえよ
う」と述べている。まさに官僚や知識人の観点ではない「お
茶の席での格好の話題」の中に、「一般的な中国人の対日認
識の一端」・日本観の形成を見ようとされるのであり、大変
に魅力的な課題の設定である。そして、『点石齋画報』は、
そのさいの最適の資料であるという見解も納得できる。

こうして、『点石齋画報』の「明治中期前後のさまざまな
日本——例えば明治維新前後の社会の変化、生活風景、珍
談・奇談、および日中間の人的交流や文化的影響、中国に
おける日本人と日本における中国人、相互の摩擦や戦争な
どを題材とするもの」の中から、「明治日本の社会・生活
風景(珍談・怪聞を含む)およびその時代の日中交流に関連
する」八〇の記事が選出され収録されている。氏は、『点
石齋画報』に関するこれまでの研究は日本に関連する記事
の収録数が少なく、そのうえ「大部分は両国間の戦争(日清
戦争)に関するもの」であるので、この『画報』を資料と
する「系統的な研究はこれまで皆無に等しい」と指摘して
いる。

本書の構成は次のとおりである。各章の冒頭には、その
章の構成意図(記事の収録意図)が述べられており、絵入り
記事とその口語訳、そして著者の注釈によって構成されて
いる。

▶ トップページにもどる

序章	中国絵画の中の日本
第一章	日中の交流(二五図)
第二章	明治の新風俗(一一図)
第三章	明治社会の風景(一五図)
第四章	日本の習俗と異聞(一三図)
第五章	日本の珍談・奇談(二)(一一図)
第六章	日本の珍談・奇談(二)(二五図)
原文・清代度量衡対照表・主要参考文献・あとがき	

第一章は、一九世紀八〇年代中葉から九〇年代初頭の中
国における日本人、日本における中国人の活動に関するも
のである。「当時の両国の交流の友好的な面が活写されて
いる」。

第二章では、欧化政策のもとに導入される防疫、体育教
育、女子教育などに驚嘆する一方で、「日本人は器用であ
る」という「イメージ」が引き継がれているとする記事が収
録されている。

第三章では、新旧交替・融合・混淆する激動の時代の中
での伝統的な祭り、敬老の風習や長寿社会という「イメー
ジ」、「天長節の盛大さ」を示すもの、「皇后の靖国神社参
拜」などを「世相の一端」を示すものとして収録している。

第四章・第五章・第六章では、『点石齋画報』の「重要な
趣旨の一つ」である「大衆に茶飲み話の素材を提供する」こ
とに応える国内外の異聞、珍談、奇談など、「興味本位」
に取り上げられたものが収録されている。特に第四章では
「異聞」と日本人の国内外における「習俗」、第五章では「主
に人物にまつわる珍談・奇談の類」、第六章ではハマグリ、
亀、ムカデ、大蛇、ヒキガエル、など動物にかかわる珍談・

奇談が収録されている。

ところで、石曉軍氏は、上記のように各章の冒頭の二頁ほどで絵入り記事のあらましを解説しているが、記事のそれぞれについて、またそれらから導き出される日本観について、特に総括的・結論的に述べることはしていない。むしろ、それぞれの章立てのもとに収録された記事内容をして「日本観」を語らしめているようである。その意味では、絵入り記事であるから、まずはその絵と記事をみて読者である我々が考えるように仕向けているようでもある。それはそれとして、この時代を考えるに当たっては有効であるとおもう。

しかしやはり、一五年間に『点石齋画報』が提供してきた「お茶の席での話題」によってどのような日本観が形成されたのか、歴史的な変遷・転換はなかったのか、それはどういう「話題」の中に読み取れるのか、等々、やはり石氏の分析の結果を知りたい、とおもう。

石氏の観点に立つて、筆者が『点石齋画報』を読むとき、日清戦争以前に登場する日本人の多くは女性であることが興味深い。たとえば「乃見狂旦」（二八八四年九月・乙三）には、上海について「男子無良、婦人無恥」「風俗之淫、本埠尤甚。自長三以迄花娼間、其公然插標招迎」などという説明があり、遊郭・売春の隆盛など、風俗の乱れを嘆く絵の真ん中に、東洋茶館Ⅱ薔艶楼が描かれ、その二階から通りの客に向かい、三味線を抱えた和服の女性が秋波を送り、一階の入り口ではやはり和服の女性が待ち構えている。さらにまた石氏も収録している「和尚尋飲」（女郎買いする生臭坊主）の説明には、「一二年前、本埠之東洋茶館、止有三五家。……今則望衡对宇、且百十家矣」とあるよう

▶ トップページにもどる

に、東洋茶館とはすなわち日本式遊郭である。また同じく「焼餅離奇」（焼き餅奇聞）では、その後半部分で「説者謂日本女子本類野鷄、大都無情無義、所綢繆者錢耳」というような説明内容、また同じく「日妓歌舞」（日本人芸妓の踊り）でも、あくまでも「日妓」である。こうした文脈で語られている日本人が「お茶の席での話題」となったとき、どんな日本観が形成されるのであろうか。

ともあれ、日清戦争以前は、日本は多くは「東洋」「東方」「日本」という言葉で表現されていたが、宣戦布告前の高陞丸撃沈事件から始まる日清戦争によって、絵入り記事の論調（もちろん絵そのものも）は一変する。日本は「海盜」と同じになり（形同海盜）、「倭人不遵万国公報、戦書未下遽爾開兵」（海戦捷音）、戦闘の実態はともかくとして、「国小民貧、不自量力、甘為戎首、欲与中国從事干戈」となる。そして「日本」は「倭国」、「日本人」は「倭民」、「倭兵」、「現地司令官は「倭酋」となり、「倭人婦人、本無廉恥」（以身報国）、「惟倭奴行同禽獸、冥頑無知同族」と断じられ、かつ「倭龜」（後のいわゆる従軍慰安婦を連想させる。ただし、この時は日本人）、「倭兵之在朝鮮姦淫搶劫、無所不至」、「倭奸」（日本人スパイ）（軍令森嚴）を非難される。そして天皇は「倭主」「倭王」あるいは「梟雄」、皇后は「倭后」などという表現が用いられた絵入り記事が頻繁に刊行される。下関条約締結後、台湾が「倭籍」に入り、一時期「倭寇」「倭兵」「倭軍」「倭艦」などの表現が使用されるが、その後しだいに「倭」の文字が姿を消し、「日人」「日官」「日船」など「日」を冠した表現に変わる。

私は、こうした表現を用いた絵入り記事が「お茶の席の話題」となったであろうから、これらが明治日本に関する「イメージ」形成、中国人の「日本観」の形成にどのような

▼『東方』288号より

四 「お茶の席での格好の話題」から日本観を探る

▲ 高橋 孝助

影響を与えたのか、また何を背景にどういう変遷をしたのか、非常に知りたところである。しかし、こうした「話題」は一過性のもので表層的であり、ことが終われば、石氏が本書で紹介されたような、むしろ深層に類するような伝統、風俗、習慣などにもとづいて形成される「日本観」に戻っていく、と考えた方がいいのだろうか。

以前、私は『点石齋画報』における日本のイメージ（一九九五年）なる雑文を書いたことがあるが、石氏が掲げる魅力的なテーマと収録された絵入り記事に刺激されて、再びチャレンジしてみようとおもっている。

◀ 今月の『東方』

◀ 書評目次へ

▶ トップページにもどる